様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５９９４９

研究課題名（和文）へき地診療所における看護充実に向けた連携体制の構築

研究課題名（英文）Establishment of systems for collaboration to improve nursing care provided by clinics in rural areas

研究代表者
坂本　雅代（SAKAMOTO, Masayo）

高知大学・教育研究部医療学系・教授

研究者番号：８０２９０３６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：　目的は、へき地診療所の看護充実に向け、へき地診療所とへき地医療拠点病院、看護系大学との連携体制の構築を図る。方法は拠点病院と診療所の交流支援の実態調査を行った。拠点病院からは情報交換等限られた交流で、診療所からは研修会や看護者派遣体制等への支援が求められた。
　へき地診療所の看護の充実には、診療所と拠点病院双方の人間関係作りの基、情報の開示や看護実践力の向上、組織体制の強化に取り組むこと。大学は、双方の連携体制の構築に向けネットワーク作りや情報（収集・調整・発信）コントロールの役割がある。

研究成果の概要（英文）：　The study was conducted to help improve nursing care in rural areas by establishing systems for collaboration among clinics in rural areas, core hospitals for health care in rural areas, and nursing colleges. A survey of the status of support for exchange between core hospitals for health care and clinics was conducted. Staff members of core hospitals stated that their interaction with clinics was limited to information exchange and a few other activities, and clinics wished to receive support to hold workshops and establish a system for dispatching nurses.
　To improve nursing care services provided by clinics in rural areas, it is necessary to promote information disclosure, improve the practical skills of nurses, and strengthen the organizational system, while enhancing the relationship skills of both clinic and core hospital staff. Nursing colleges are required to play roles in facilitating collaboration between clinics and core hospitals and controlling information.

研究分野：基礎看護学

キーワード：へき地診療所　へき地拠点病院　ネットワーク構築

１．研究開始当初の背景

山村、離島などのへき地における医療の確保については、へき地保健医療計画により実施されている。山村等の多い高知県では、第6期保健医療計画が平成25年度から30年までの5年計画で進められており、その保健医療計画の中には、へき地医療に関する事項が掲載されている。へき地の公的医療提供体制としての医療提供施設には、へき地診療所・過疎地域等特定診療所と、へき地医療拠点病院があり、双方共にへき地医療にとって重要な役割を担っている。へき地などの医療提供体制に対する支援策としては、へき地医療支援機構の指導・調整を基に、医療従事者確保等の対策が講じられているが、看護者の状況をみると中山間地域においては、看護者の確保が難しい現実がある。まして、へき地で生活する人々の生命や健康を守る重要な担い手であるへき地診療所の看護者の支援に対しては、勤務環境を整える必要性がうたわれているが具体策が提示されていない。そのため、へき地診療所で働く看護者は、医師不在時の緊急対応への戸惑いや、相談・支援体制の不備、学習ニーズが満たせないなど多くの課題を訴えていた。

２．研究の目的

へき地診療所の看護者への支援策として、へき地医療拠点病院との看護充実に向けた連携・協働において、何か適切な支援ができないか、その支援に向けた方策を検討することである。

３．研究の方法

【平成24年度】

対象：高知県へき地医療拠点病院で、へき地医療・看護について支援を行っている部署の看護者とした。

データ収集方法：半構成的な面接調査

データ収集内容：対象者の背景、へき地診療所への看護支援の実際（支援を求められた内容、取り組んだ内容、課題は何か）、へき地診療所への今後の支援の可能性、地元看護系大学への役割期待。

分析方法：調査目的に沿って内容を抽出しカテゴリー化を行った。

【平成25年度】

対象：高知県のへき地医療支援機構において、診療所として掲載されている20ヶ所の診療所に勤務する看護者とした。

データ収集方法：郵送法による無記名アンケート調査

データ収集内容：①対象者の背景　②看護者間の交流支援の必要性（情報交換できる環境整備、看護に関する連絡会開催、患者支援に関する情報交換会、看護技術に関する研修、看護の動向に関する研修、看護者派遣体制について、看護者確保の紹介体制、相談体制、研修などの情報公開　③地元看護系大学への役割期待。

分析方法：単純集計を行い、統計解析には統計ソフトSPSS for Windows19.0を用いた。

【平成26年度】

平成24年度並びに25年度で得られたデータを基に、連携体制の構築を図った。

４．研究成果

【平成24年度】面接の調査結果

（１）対象者の背景

面接を行ったへき地医療拠点病院は5病院であり、対象者は9名であった。その9名の立場は、看護部門の責任者7名、へき地の診療所など地域への対応責任者2名であった。

（２）へき地医療拠点病院におけるへき地診療所への交流・支援の実際

交流・支援の実際では、交流・支援がなしと、交流・支援がありに大別された。交流・支援がなしでは、4カテゴリーと10サブカテゴリーが導き出され、交流・支援ありでは、6カテゴリーと14サブカテゴリーが導き出された。

以下にその内容について、カテゴリーは、≪≫で、サブカテゴリーは〈〉で示す。

①交流・支援なし

≪組織基盤の違い≫とは、限られた組織の範囲を超えているもので、〈連携が弱い〉〈管轄が異なる〉であった。

≪地域環境の隔たり≫とは、診療所と拠点病院との物理的距離が離れているもので、〈患者・スタッフの交流がない〉〈地理的に遠い〉であった。

≪関係の未構築≫とは、人間関係などの交流が無く、教育ニーズ等が把握できていないもので、〈学習への呼びかけがない〉〈共有の場がない〉〈顔見知りがいない〉〈時間が困難〉〈交流の場がない〉であった。

≪交流への意識の違い≫とは、拠点病院の機能について、その役割を認知していないもので、〈へき地拠点病院の役割不足〉であった。

②交流・支援あり

≪職場訪問・巡回≫とは、診療所の施設の見学や、立場上役割を遂行するために交流をもっているもので、〈電子カルテ導入時の視察〉〈安全衛生環境視察〉であった。

≪研修・交流会での意見交換≫とは、すでにお互いに意見交換や情報を公開しているもので、〈研修交流会への参加〉であった。

≪患者支援への情報交換≫とは、患者に必要な情報提供や交換を行っているもので、〈患者の紹介〉〈患者の情報提供連携パス〉であった。

≪看護師確保への支援≫とは、限られた人脈の中で、困難を受けとめると共に、候補者探しなどへの支援を行っているもので、（確保困難への理解）〈看護師候補者の紹介〉であ

った。
≪困りごとへの支援≫とは、看護を展開する上で生じた課題解決への支援を行っているもので、〈情報提供〉〈アドバイス〉〈問題解決への中継ぎ〉であった。
≪学習への支援≫とは、拠点病院で実施している研究情報の提供や、学習への内容を開示しているもので、〈研修案内の開示〉〈研究会へのお誘い〉〈教材の貸し出し〉であった。

（３）へき地診療所との交流・支援の今後の可能性
交流・支援の可能性では、5 カテゴリーと 16 サブカテゴリーが導き出された。
≪看護情報の開示≫とは、新人教育やセミナーなどの情報を提供しているもので、〈看護に関する情報公開〉〈勉強会の情報公開〉であった。
≪地域看護情報の共有化≫とは、地域の特性や課題の解決に向けているもので、〈地域の繋がり作り〉〈地域特有の看護問題への対処〉〈情報交換〉〈悩みの共有〉〈組織連携〉であった。
≪交流場所の提供≫とは、人的関係構築に向けているもので、〈病院規模に応じた交流会〉〈定期的な会合機会〉〈地域との交流発展への期待〉であった。
≪学習への支援≫とは、看護者の成長に向けているもので、〈院内学習会への受け入れ〉〈出張のよる指導〉〈最新の知識や技術の提供〉であった。
≪相談ごとへの支援≫とは、問題解決に向けているもので、〈相談活動〉〈相談窓口の開設〉〈困りごとへの相談対応〉であった。

（４）へき地拠点病院からみた地元看護系大学への役割期待
地元看護系大学への役割期待の内容は、5 カテゴリーと 12 サブカテゴリーが導き出された。
≪拠点病院の看護役割の明確化≫とは、拠点病院における診療所への看護の事業等が不明確なことから、機能の明確化を望むもので、〈事業内容の明確化〉であった。
≪看護情報ネットワーク造り≫とは、拠点病院・診療所・大学が遠距離にあって、身近に看護情報や指導が得られにくいことから、回線による繋がりを望むもので、〈電子媒体による看護の拡大〉〈電子媒体による看護の指導〉であった。
≪拠点病院と診療所との調整役≫とは、拠点病院と診療所との意志疎通に向け関係作りを望むもので、〈拠点病院と診療所との連携役〉〈拠点病院と診療所交流会開催への調整〉であった。
≪看護実践向上への支援≫とは、拠点病院における看護の充実に向けて、教育的な支援を望むもので、〈研修会の講師〉〈研修会の開催〉〈共同研究への取り組み〉〈看護研究へのアドバイス〉〈看護技術支援〉であった。
≪へき地の看護情報の発信基地≫とは、個々の相談や情報を一元的に管理することを望むもので、〈相談窓口の立場〉〈情報の集約化と発信〉であった。

（第一次調査のまとめ）
へき地医療拠点病院からみたへき地診療所との交流・支援の実態では、経験ありと経験なしであった。経験ありの交流・支援の内容は、情報の交換や看護師支援などであった。経験なしでの交流・支援の内容は、組織基盤の違いや関係構築ができていないことなどであった。しかし今後、情報の開示や学習への支援など交流・支援の可能性が示された。
そして大学には、へき地医療拠点病院と、へき地診療所との調整役や、情報発信の基地とて役割期待が示された。

【平成 25 年度】アンケート調査結果
高知県内のへき地診療所に勤務する看護者 78 名にアンケート用紙を配布し、51 名から回答（回収率 65.4%）を得た。
（１）対象者の背景
年代の上位 3 位は 50 歳代 25 名(49.0%)、40 歳代 11 名(21.6%)、30 歳代 8 名(15.7%)であった。診療者総勤務年数上位 3 位は、0～9 年 18 名(35.3%)、20～29 年 17 名(33.3%)、10～19 年 10 名（19.6%）であった。勤務する診療所の形態は、無床診療所 26 名(51.0%)、有床診療所 25 名（49.0%）であった。

（２）へき地診療所とへき地医療拠点病院における看護者間の交流・支援の経験の有無
交流・支援の経験があるは、8 名（15.7%）であり、交流・支援の経験がないは 38 名（74.5）であった。

（３）へき地診療所とへき地医療拠点との交流・支援の体制について
①インターネットを活用した情報交換ができる環境整備について
環境が整っている 13 名（25.5%）、環境が整っていない 35 名（68.6%）であった。環境が整っていないと答えた人に、環境整備上の課題を複数回答で問うと、「看護者がいつでも自由に活用できるパソコンが必要である」17 名、「インターネットを接続する必要がある」14 名、「パソコンの使い方を学ぶ必要がある」14 名であった。

②連絡会の開催について
連絡会開催の必要性がある 37 名(72.5%)、連絡会開催の必要性がない 10 名（19.6%）であった。開催の必要性があると答えた人に、開催手段を問うと、「インターネットを活用する」16 名、「へき地医療拠点病院で開催する」14 名、「診療所で開催する」7 名、「大学で開催する」4 名であった。開催の時間帯は、「勤務時間外」19 名、「勤務時間内」15 名であった。

③患者支援に関する情報交換会について
　患者支援に関する情報交換会の必要性がある 39 名（76.5%）、必要性がない 11 名（21.6%）であった。情報交換会の必要性があると答えた人に、開催手段を問うと「インターネットを活用する」23 名、「へき地医療拠点病院で開催する」12 名、「診療所で開催する」9 名、「大学で開催する」2 名であった。開催の時間帯は、「勤務時間内」20 名、「勤務時間外」17 名であった。

④緊急時の看護技術に関する研修について
　緊急時の看護技術に関する研修の必要がある 42 名(82.4%)、必要がない 8 名(15.7%)であった。必要性があると答えた人に、開催手段を問うと、「へき地医療拠点病院で開催する」22 名、「インターネットを活用する」14 名、「診療所で開催する」13 名、「大学で開催する」3 名であった。開催の時間帯は、「勤務時間外」26 名、「勤務時間内」11 名であった。

⑤新しい医療・看護機器の取り扱い研修について
　新しい医療・看護機器の取り扱い研修の必要性がある 38 名（74.5%）、必要がない 11 名（21.6%）であった。必要性があると答えた人に、開催手段を問うと、「へき地医療拠点病院で開催する」22 名、「インターネットを活用する」13 名、「診療所で開催する」7 名、「大学で開催する」5 名であった。開催の時間帯は、「勤務時間外」22 名、「勤務時間内」11 名であった。

⑥新しい看護の動向に関する研修について
　新しい看護の動向に関する研修の必要性がある 39 名（76.5%）、必要がない 8 名（15.7%）であった。必要性があると答えた人に、開催手段を問うと、「へき地医療拠点病院で開催する」19 名、「インターネットを活用する」19 名、「診療所で開催する」8 名、「大学で開催する」4 名、であった。開催の時間帯では、「勤務時間外」20 名、「勤務時間内」15 名であった。

⑦診療所看護者不在時の看護者派遣体制について
　看護者派遣体制の必要がある 28 名（54.9%）、必要がない 17 名（33.3%）であった。必要があると答えた人に、派遣体制を整える手段を問うと、「どのように派遣するか、仕組みを整えてほしい」21 名、「近くの拠点病院から派遣して欲しい」8 名、「派遣窓口を明らかにしてほしい」8 名（3.9%）であった。

⑧診療所勤務看護者確保への紹介体制について紹介体制を整える必要がある 32 名（62.7%）、必要がない 14 名（27.5%）であった。必要があると答えた人に、紹介体制を整える手段を問うと、「どのように紹介するか、仕組みを整えてほしい」25 名、「派遣窓口を明らかにしてほしい」7 名、「近くの拠点病院から派遣して欲しい」6 名であった。

⑨診療所における相談体制について
　診療所勤務において緊急時や困って時の相談できる体制の必要がある 39 名(76.5%)、必要がない 10 名（19.6%）であった。必要があると答えた人に、相談体制を整える手段を問うと、「どのように相談するか、仕組みを整えてほしい」25 名、「近くの拠点病院が相談に対応してほしい」10 名、「どこの拠点病院が相談対応してくれるか、相談窓口を明らかにして欲しい」10 名であった。

⑩拠点病院における研修会や研究会の情報公開について
　情報公開をする必要がある 42 名(82.4%)、必要がない 6 名（11.8%）であった。必要はあると答えた人に情報公開の手段を問うと、「チラシなど紙媒体を活用する」22 名、「インターネットを活用する」15 名、「大学で情報を集約して配信する」7 名、「電話を活用する」2 名であった。

診療所と拠点病院との交流の発展に向けて看護学科への役割期待

（1）連携がとれるようにネットワーク作りに期待するは 34 名（66.7%）、とても期待するは 11 名（21.6%）、期待しないは 4 名（7.8%）であった。

（2）相談や困りごとを繋げる中間的役割を担うことを、期待するは 36 名（70.6%）、とても期待するは 6 名（11.8%）、期待しないは 5 名（9.8%）であった。

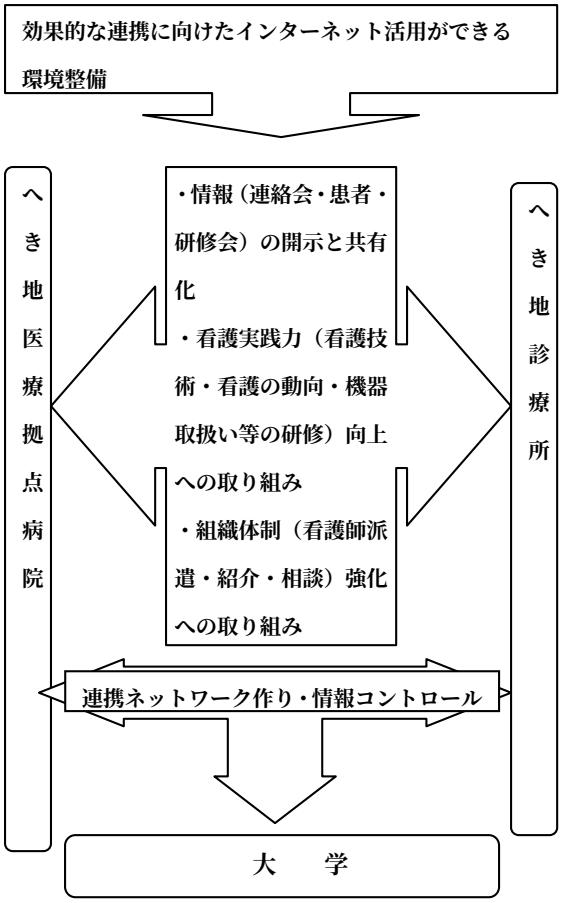
（3）情報をまとめて発信する基地の役割を担うことを、期待するは 37 名（72.5%）、とても期待するは 6 名（11.8%）、期待しないは 4 名（7.8%）であった。

（第二次調査のまとめ）
　へき地地診療所から拠点病院に対する交流支援には、連絡会や情報交換会などの繋がりを求めると共に、新たな知識や技術などの研修を 7 割以上の人が必要としていた。これは、診療所の限られた環境の中で仕事をしていることから、様々な視点から情報等を得る必要性を感じていると考える。

【平成 26 年度】連携体制の構築

　へき地診療所における看護充実に向け連携体制の構築
　へき地診療所は、人的・環境的にも限られた状況にあることから、周りとの効果的な連携・協働体制を整えることが重要となることが確認された。そこで、へき地医療拠点病院

並びにへき地診療所とのネットワークを構築すると共に、そのネットワークを支援する組織として大学が加わり、お互いの組織体制の中で持てる力を発揮する仕組みを整えることが重要である。その仕組みづくりには、人的環境として双方の顔を見える関係づくりを行うこと、物理的環境として患者情報や研修情報など情報交換のツールとなるインターネットの活用が有効であると考える。そしてそれらの体制構築により、医療の複雑高度化に対応する必要な看護の知識や技術の向上へとつながると期待される。



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１件）

①杉本加代・坂本雅代・齋藤美和・阿波谷敏英：へき地診療所看護職のへき地医療拠点病院看護職との交流の必要性、日本ルーラルナーシング学会誌、10：15-21、2015、査読有

〔学会発表〕（計２件）

①坂本雅代・齋藤美和・杉本加代・阿波谷敏英：A 県のへき地医療拠点病院看護職からみた地元看護系大学への役割期待、日本ルーラルナーシング学会第８回学術集会、2013 年 10 月 13 日-14 日、和倉温泉観光会館、石川県

②坂本雅代・齋藤美和・杉本加代：A 県におけるへき地診療所看護職に対するへき地医療拠点病院看護職の交流支援の実際、第 33 回日本看護科学学会学術集会、2013 年 12 月 6-7 日、大阪国際会議場、大阪府

６．研究組織

（１）研究代表者

坂本　雅代（SAKAMOTO,Masayo）
高知大学・教育研究部医療学系・教授
研究者番号：80290360

（２）研究分担者

森木　妙子（MORIKI,Taeko）
高知大学・教育研究部医療学系・准教授
研究者番号：60380317
(H24-H25)

齋藤　美和（SAITOU,Miwa）
高知大学・教育研究部医療学系・講師
研究者番号：50403902

杉本　加代(SUGIMOTO,Kayo)
高知大学・教育研究部医療学系・講師
研究者番号：70403904

阿波谷敏英（AWATANI,Toshihide）
高知大学・教育研究部医療学系・教授
研究者番号：10467863